中島みゆきの反「時代」的憲法への慕情

山内亮史

「甘えてはいけない　時に情は無い　手離してならぬ筈の何かを　間違えるな」

（中島みゆき「慕情」）

私が中島みゆきについて、この同時代に「屹立するパフォーマーとして持つことを幸いとしたい」と記してからもう三〇年になる（『中島みゆきの社会学』青弓社、絶版）。

今回の俄か選挙の期間中ずっと、彼女の歌う「慕情」が私の脳裏に棲み着いてしまった。この歌は、倉本聰（因みに彼は中島みゆきを長年の愛人といってはばからない）のヒットドラマ「やすらぎの郷」の主題歌であった。ドラマは、タレントとしての昔の栄光で暖め合いながら暮らすケアホームが舞台であったから、この歌はどう考えても恋歌でしかあり得ない。しかし、「海から産まれて来た　それは知っているのに　どこへ流れ着くのかを知らなくて怯えた」など、聴き進むうちにこれは憲法への慕情ではないのかと思い始めた。

もう長い間、私は彼女の詩歌の中に「時代を背負う畏れと輝き」と「義への情熱」を読んできたし、時の流れの中で立ち停まり、過去と向き合い気づき、そして斗い傷つき越えてゆこうとする人たちへの寄り添う心根を受け取ってきた。彼女の言葉による実験劇場「夜会」は「私たちは二雙の舟　ひとつずつのそしてひとつの」というテーマソングで貫かれている。

他者でありつつ関係を生きる私たちの生の様式、そこに持ち込まれる暴力的意思調達の装置としての国家、中島みゆきはこれまで四〇年に及ぶ歌暦の中で、見事なまでの言葉使いで、政治的メッセージが露わになることを抑制してきたが、時に荒ぶるまでに国家と対峙する表現者としての姿を私は見てきた。

とりわけ一昨年、昨年と、脚本と演出を修正しながら臨んだ夜会「橋の下のアルカディア」は、鮮烈な印象を与えた。「慕情」はその続きとして聴いたのである。

この舞台は、「すべての吹き寄せるところ」（森敦「月山」）である都会の橋の下のうらぶれたシャッター街と化した地下道である。そこにまちのネズミのごとく霞を食べて生きているようなスナックのママや占い師、そして「すあま」と名付けられた猫が住み着いており、そこにある日脱走兵が逃げ込んでくるところから、その橋と地下道商店街の歴史が閉鎖計画の現実とクロスされて、ストーリーが展開されてゆく。

脚本、作詞、作曲、主演の中島みゆきは、「なぜか橋の下」、「一問も解けないうちに問題ばかり降ってくる」と歌う「問題集」、「いらない町になる、ある日、決まりが伝えられる」と歌う「いらない町」、「シャッター街は恋をする」と歌い継いで、歴史に翻弄されてゆく人々の悲しみを圧倒的歌唱力で歌いつつ、「川の怒り鎮める貢ぎ物人柱」に至る。「荒れ狂う流れは　水じゃなくて人です　止めることのできない嵐は人です」と。

やがて脱走兵は零戦の特攻隊員であることがわかる。「私がこの地を守るのは追われた兵士を隠すため　戦さを捨てた国の恥　我が父親でありました」。クライマックスは、二度と「生け贄にならぬよう」、「国捨て」を呼びかけられた兵士が零戦に乗って飛び立つのである。夜の中へ、戻る場所はもうない。「飛び立て、飛び立て」のリフレインが続く。彼方は約束の地か。バックステージの壁が割れて実物大の零戦が爆音と共に出てくる演出の迫力は半端ではなかった。これは語り継がねばならない。

みゆきは歌う、「御国の恥とは何ですか／私の願いは空を飛び／人を殺す道具ではなく／幸せにする翼だった」と。そして昨年、「空がある限り」の中で「アゼルバイジャンの夕暮れは女満別の夕暮れと変わらない／空がある限り私の暮す町」と、難民の人々を歌った。

「限りない愚かさ　限りない慕情　もいちどはじめから　もしもあなたと歩きだせるなら」。これはどう考えても、私には憲法への「慕情」と聞こえる。

＜やまうち　りょうじ・旭川大学学長＞